

ヨエル書とラオデキヤ的セブンスデー・アドベンチスト教会—第三十一号

Jeff Pippenger

2026-01-18

三十一番

マタイの福音書に見いだされる最後の三つのメシア的成就是、日曜法という道標の三つの要素を指し示している。その一つは、日曜法における神の民の離散であり、それは1844年10月22日の小さき群れの離散と、十字架の時の弟子たちの離散によって型示されている。これら二つの離散はいずれも日曜法と符合している。予言的な転換点の象徴であるガリラヤと結びついて、日曜法に至るまで闇の中にいた人々が、闇から呼び出されることになる。その人々こそ神のもう一つの群れ、すなわち、バビロンから出るように召される中で安息日をめぐる論争の問題に目を覚まされる「十一時の働き人」である。彼らがバビロンから出るように召されることは、裁きの第二段階であり、それは神の家から始まり、そして日曜法の時にエルサレムの外にいる者たちに及ぶ。

第十のメシア的な道しるべは、日曜法による離散である。

しかし、すべてこうなったのは、預言者たちの書の言葉が成就するためであった。そのとき、弟子たちは皆、彼を見捨てて逃げ去った。マタイによる福音書 26:56。

予測

「目覚めよ、剣よ。わたしの羊飼いに、わたしの仲間である者に向かって」と万軍の主は言われる。「羊飼いを打て。羊は散らされる。わたしは小さい者たちにわたしの手に向ける。」ゼカリヤ書 13:7

「私たちはまもなく広く散らされるので、なすべきことは急いで行わなければならない。」『キリスト教教育の基礎』535頁。

やがて、私たちは分かたれ、散らされ、同じ尊い信仰を持つ者たちとの交わりという特権なしに、私たち一人ひとりが自ら立たなければならない時が来ます。神があなたの傍らにおられ、神があなたを導いておられることをあなたが知っていなければ、どうして立っていられるでしょうか。Review and Herald, 1890年3月25日。

第十一のメシア的な道標は、異邦人の召しである。

これは、預言者イザヤによって語られたことが成就するためであった。「ゼブルンの地、ナフタリの地、海沿いの道、ヨルダンの向こう、異邦人のガリラヤ。闇の中に住んでいた民は大いなる光を見、死の陰の地に住んでいた者たちに光が輝いた。」マタイによる福音書 4:14-16

予測

しかし、その陰りは、その地が苦悩のうちにあったころ、すなわち、はじめにゼブルンの地とナフタリの地が軽く苦しめられ、のちには海沿いの道、ヨルダンの向こう、諸国民のガリラヤでさらに厳しく苦しめられた、そのときほどではない。暗闇の中を歩んでいた民は大いなる光を見た。死の陰の地に住む者たちの上に光が輝いた。イザヤ書 9:1、2。

日曜法が制定されると、後の雨が惜しみなく注がれ、異邦人は大いなる光を見る。迫害は忠実な者たちを散らし、そのメッセージを広める。

「彼らはあなたがたを議会に引き渡し、…さらに、わたしのために、彼らと異邦人への証しとして、総督や王たちの前にあなたがたを引き出すであろう。」マタイ10章17、18節、R. V. 迫害は光を広めるであろう。キリストのしもべたちは、世の大いなる者たちの前に引き出される。このことがなければ、彼らは決して福音を聞くことがなかったであろう。真理はこれらの人々に対して誤って伝えられてきた。彼らは、キリストの弟子たちの信仰についての偽りの告発に耳を傾けてきた。しばしば、彼らとその本来の性質を知る唯一の手段は、信仰のゆえに裁判にかけられた者たちの証言である。尋問のもとで、これらの者は答えることを求められ、裁判官たちはなされた証言に耳を傾けねばならない。神の恵みが、この緊急の事態に対処するために、そのしもべたちに注がれる。『その同じ時に、何を語るべきかがあなたがたに与えられる。語るのはあなたがたではなく、あなたがたの父の御霊が、あなたがたのうちで語られるからである』とイエスは言われる。神の御霊がそのしもべたちの心を照らすとき、真理はその神的な力と尊さをもって示される。真理を拒む者たちは、弟子たちを訴え、迫害するために立ち上がる。しかし、損失と苦難のただ中であって、死に至ることがあっても、主の子らは、その神の模範の柔和をあらわすべきである。こうして、サタンの手先とキリストの代表者たちとの対照が明らかになる。救い主は、支配者たちと民の前に高く掲げられるであろう。

弟子たちは、そのような恵みが必要となるまでは、殉教者の勇気と剛毅を授けられてはいなかった。そのとき、救い主の約束が成就した。ペテロとヨハネがサンヘドリン議会の前で証言したとき、人々は「驚き、彼らがイエスと共にいた者であることを知った」。使徒 4:13。ステパノについては、「議会に座っていた者はみな、彼をじっと見つめ、彼の顔がまるで天使の顔のようであったのを見た」と書かれている。人々は「彼が語る知恵と霊に対抗することができなかった」。使徒 6:15, 10。またパウロは、カエサルの法廷での自らの裁判についてこう述べている。「私の最初の弁明のとき、だれも私の側に立ってくれず、皆が私を見捨てた…。しかし、主は私のそばに立って私を強めてくださった。それは、私によってメッセージが余すところなく宣べ伝えられ、すべての異邦人が聞くためであった。そして私は獅子の口から救い出された。」テモテ第二 4:16, 17, R. V.

キリストのしもべたちは、裁判に引き出されたときに述べるための決まった弁明を用意しておくべきではなかった。彼らの備えは、神の御言葉の尊い真理を心に蓄え、祈りによって信仰を強めるといった日々の歩みの中でなされるべきであった。彼らが裁判に引き出されたとき、聖霊が、まさに必要とされるその真理を思い起こさせてくださるであろう。The Desire of Ages, 354, 355.

裁きは9/11に神の家から始まり、日曜令で終わり、そのとき裁きは神の家の外にいる神のもう一つの群れへと移る。

第十二のメシア的な道しるべは、異邦人への裁きである。

これは、預言者イザヤを通して語られたことが成就するためである。「見よ、わたしの選んだしもべ、わたしの愛する者、わたしの心にかなう者。わたしは彼の上にわたしの霊を置く。彼は異邦人に裁きをもたらず。彼は争わず、叫ばず、通りでその声を聞く者もない。傷ついた葦を折らず、くすぶる灯心を消さない。ついに裁きを勝利に至らせるまで。異邦人は彼の名に望みを置く。」マタイによる福音書12章17-21節

予測

見よ、わたしのしもべ。わたしが支える者、わたしの選んだ者。わが魂は彼を喜ぶ。わたしは彼の上にわが霊を置いた。彼は諸国民にさばきをもたらず。彼は叫ばず、声を上げず、街でその声を聞かせることもない。傷ついた葦を折らず、くすぶる灯心を消すこともない。彼は真実をもってさばきをもたらず。地にさばきを打ち立てるまで、彼は衰えず、くじけない。鳥々は彼の律法を待ち望む。イザヤ書 42:1-4.

神の家に対する審判の締めくくりは2023年7月に始まった。それは、干からびた骨の谷の中にある、モーセとエリヤが死んだまま横たわっていた通りで声が聞こえたときである。その声が聞こえたとき、神の家に対する審判は締めくくられ始め、異邦人への審判へと進んでいった。マタイの福音書には、十四万四千人の改革運動における主要な道標を示す十二のメシア的成就がある。それら十二の道標はメシアによって予表されている。1989年、1996年、2001年9月11日、2020年7月18日、2023年7月、2024年、真夜中の叫び、祭司の分離、そして日曜法がすべて特定されており、9/11には内的証しと外的証しがあり、日曜法には散らしの内的証しがあり、その後、十一時の働き人の審判期間に関する二人の証人がある。マタイの福音書には、十四万四千人の改革運動の九つの道標が直接特定されている。

マタイによる福音書は新約聖書のアルファであり、ヨハネの黙示録はオメガである。マタイによる福音書は、終わりの日までその意義が封印されていた、預言的な傑作である。そこにはオメガに当たる12の章が含まれており、それは創世記11章から22章におけるアルファに対応している。黙示録に対するアルファとして、それはダニエル書と黙示録の靈感による関係と並行している。ダニエル書と黙示録との預言的関係について明らかにされていることは、マタイによる福音書と黙示録の関係にも当てはまるだろう。その線に沿って私たちに知らされてきたことは、次のようなことに相当するだろう：

マタイの福音書では、黙示録と同じ預言の筋が取り上げられている。

「黙示録は封印された書であるが、同時に開かれた書でもある。それには、この地球の歴史の最後の日々に起こるであろう驚くべき出来事が記録されている。この書の教えは明確であって、神秘的で不可解なものではない。その中では、ダニエル書と同じ系統の預言が取り上げられている。神はいくつかの預言を繰り返しておられ、それによってそれらが重んじられるべきものであることを示しておられる。主は重要でない

事柄を繰り返されることはない。」Manuscript Releases, 第9巻, 8.

マタイの福音書は、黙示録やダニエル書と同じ「預言の系統」を受け継いでおり、それは黙示録において完成に至る。というのも、「complement」という語は完成を意味するからである。

『黙示録』において、聖書のすべての書は合流し、完結する。ここで『ダニエル書』は補完される。一方は預言、他方は啓示である。封印されたのは『黙示録』ではなく、終わりの時に関する『ダニエル書』の預言の部分である。御使いは命じた、「しかしあなたは、ダニエルよ、このことばを秘め、書を封じよ。終わりの時まで。」ダニエル書12章4節。『使徒行伝』585頁。

マタイ、ダニエル、黙示録は同じ書である。

ダニエル書とヨハネの黙示録は一つである。一方は預言、他方は啓示であり、一方は封印された書、他方は開かれた書である。ヨハネは雷が語った奥義を聞いたが、それを書き記さないようにと命じられた。セブンスデー・アドベンチスト聖書注解 第7巻、971ページ。

学びをヨエル書に戻す前に、マタイの福音書を、ペテロがカイサリア・フィリピにいたことの預言的意義を強調しうる文脈に位置づけるために時間を取ることは重要だと思われる。私は、カイサリア・フィリピにおけるペテロのきわめて大きな預言的意義、すなわちダニエル書11章13～15節のパニウムであることを示すために、マタイの福音書についての私の所見を要約してみたい。

マタイによる福音書は、三つの明確に区別された預言的な系列にもとづいて構成されている。第一の系列は最初の十章、第二の系列はそれに続く十二章、そして第三の系列はその後の六章からなる。最初の十章は黙示録十四章の第一の天使を表し、次の十二章は第二の天使を表し、最後の六章は第三の天使を表している。私はまだこの見解を明確に立証してはいないが、それは容易に成し得る。そうする前に、マタイによる福音書というキャンバスに、より太い筆致でいくつかの輪郭を描き続けたい。

十一章から二十二章にかけての第二の系列は第二の天使によって表されており、この第二の天使は常に二度の繰り返しを指し示す。なぜなら「バビロンは倒れた、倒れた」からである。創世記の十一章から二十二章は、族長アブラムを通して、選ばれた民に対する神の約束と、その後の三段階の契約を示している。それら十二章のまさに中央の節は、契約のしるしとして「割礼」を示しており、それは三段階のうち第二段階で確立された。マタイにおける並行する契約の系列のまさに中央の節は、シモン・バルヨナの名がペテロに変えられる箇所である。

また、わたしはあなたに言う。あなたはペテロである。この岩の上に、わたしはわたしの教会を建てる。黄泉の門はこれに打ち勝つことはない。マタイ 16:18

ペテロの名は十四万四千人を表しており、彼はキリストのメッセージを聞いたことを土台に信仰を持つ人々の一群を代表している。それは単にイエスについてのメッセージではなく、主ご自身がペテロに与えられたものとイエスが認めたメッセージである。

彼は彼らに言った。「しかし、あなたがたはわたしをだれだと言うのか。」

するとシモン・ペテロが答えて言った、「あなたはキリスト、生ける神の子です。」
するとイエスは彼に答えて言われた、

シモン・バルヨナ、あなたは幸いです。なぜなら、これをあなたに明らかにしたのは
血肉ではなく、天におられるわたしの父だからです。マタイ 16:15-17.

ペテロの信仰は、イエスがキリスト-メシア-となられたことに基づいている。ペテロの名は、契約関係を示すためにアブラムの名が変えられたのと同様に換えられており、彼の名は144,000に相当する。そしてまさにその節で、大いなる論争は教会の土台である岩として示され、その岩は地獄の諸教会に打ち勝つとされている。十四万四千人は、選ばれた契約の民の最終的な現れであり、ペテロはその集団を代表している。

ペテロはまた、同時に、最初のキリスト教会、すなわち弟子たちの教会を象徴している。というのも、それはキリストがご自身の教会の土台を据えられた歴史だからである。キリストは土台であり、また要石でもあり、ペテロは最初のキリストの花嫁と最後のキリストの花嫁の象徴である。ゆえに、ペテロは一節の中でアルファとオメガの両方の象徴である。

その一節は、第二の天使のメッセージを表す十二章の中心となる節であり、ペテロは最初の花嫁と最後の花嫁の双方として「二重の役割」を果たす。最後の花嫁はサタンの会堂と戦うことになり、二つのグループから成る。一方は十四万四千人、もう一方は大群衆である。大群衆はスミルナに、十四万四千人はフィラデルフィアに表されている。

十四万四千人はフィラデルフィアの人々であり、十八節におけるペテロの改名は十四万四千人の封印を表している。彼は封印された者たちの象徴であり、その節、すなわち契約に関する十二章のまさに中心の節において、創世記の十二章のまさに中心の節と対応している。そこでは、割礼がしるしとして定められている。黙示録の十一章から二十二章は、契約の証しの十二章に対する第三の系列をなしており、それら十二章の中心の節は、黙示録十七章の大淫婦と地の王たちとの結婚を示している。

かつては存在し、今は存在しないその獣は、第八のものであり、七つのうちの一つであり、滅びに至る。ヨハネの黙示録 17:11

この節は、大いなるバビロンの最終的な陥落を特定することに関わっており、バベルの最初の陥落は、創世記の十二章からなる契約の系譜の第一章で起こった。中心節においてペテロは十四万四千人を代表しており、それは創世記の中心節と一致している。黙示録の中心節において、大いなるバビロンの陥落が、バベルの大いなる狩人ニムロデの物語に結末をもたらす。

これら三つの預言的なラインのそれぞれの中心の節は、神の封印か獣の刻印のいずれかを指し示している。創世記におけるバビロンの死の契約の始まりは、黙示録でその終わりに至る。こうして、それは三つのラインがラインにラインを重ねて一つに集められるとき、三つすべてのラインに始まりと終わりを与える。岩と地獄の門との間の大争闘の象徴としてペテロが用いられている場所が、第二の天使のメッセージである。というのも、第二

の天使のメッセージとは「バビロンは倒れた（ニムロデ）、倒れた（ローマの娼婦）」だからである。マタイの三つのラインにおける第二のラインは第二の天使のメッセージであり、それはバビロンの二度の倒れを示している。真の婚姻が成就するまさにその場所、すなわち日曜法において、偽りの婚姻を提示する。それは、真の八である神の民を偽るものとして「8」という数を表す。また、教皇制は神を偽るものとしても描かれる。というのも、それはかつてあり、今もあり、そして上ってくるからである。それは、旗印が掲げられるまさにその場所、すなわち日曜法で、上ってくる。

マタイの福音書にはメシア的成就が十二あり、旧約聖書にはメシアに関する預言が三百から五百ある。マタイの福音書には、他の三つの福音書をはるかに凌いで、直接的に特定された成就が十二含まれている。これら十二の成就是、十四万四千人の改革運動における九つの明確な道しるべと一致している。九は完全を象徴する。なぜなら「九」の先に新たな数字はなく、「九」以降のあらゆる数は、一から九の九つの数字とゼロの組み合わせで表されるからである。九は充満である。これら九つの道しるべのうち、二つはマタイに挙げられている成就を複数含む。9/11には二つ、日曜法には三つある。

1989年の終わりの時、1996年のメッセージの公式化、そして9/11、続いて2020年7月18日の失望、さらに2023年7月の荒野で叫ぶ声、それが2024年の復活へとつながり、そこから真夜中の叫びへ、そして祭司たちの分離が続き、日曜法で頂点に達する。九つの道標があり、そのうち一つには二人の証人が、別の一つには三人の証人がいる。9/11には二人、日曜法には三人である。これは、十四万四千人の改革の路線において、9/11の二人の証人から日曜法の三人の証人に至るまでが、十四万四千人の封印の時を画することを意味する。十二の道標はあらゆる改革運動と一致しており、そうすることで、9/11から日曜法に至る間における十四万四千人の封印の時を強調し、明確に示している。

そうすることで、9/11における二人の証人と、日曜法における三人の証人を特定する。9/11の二人の証人は第二天使のメッセージであり、日曜法の三人の証人は第三天使のメッセージである。ゆえに、マタイが記録したメシアに関する預言の成就から導かれる筋道は、封印の時期を切り出して強調しつつ、封印の時期の歴史におけるアルファとして第二天使を、オメガとして第三天使を位置づける。つまり、封印の時期は数字の2と数字の3に両端を挟まれており、その結果、贖いの象徴である23を封印の歴史全体に冠することになる。

マタイによる福音書には三つの預言的な系があり、それぞれが第一、第二、第三の天使を表している。そしてマタイの第二の系にある十二章は、十四万四千人との契約を表しており、というのも、それは創世記におけるアブラムとの「アルファ」の契約に対する「オメガ」だからである。これはまた、第二の天使として、ペテロが最初と最後のキリストの花嫁の双方を表すとき、ペテロの二重化が第二の天使における二重化という預言的要件を確立することを意味する。三人の証人によって、十二という数は十二章からなる三つの系を束ねる縄となる。したがって、マタイによる福音書の中で十二という数の別の表れを見いだすとき、それはマタイによる福音書の他の十二と整合していなければならない。

マタイの福音書の第11章から第22章までの12章は、象徴的な数である11で始まり、その対応する象徴である22で終わっており、十二のメシア的成就によって表される十四万四

千人の改革の路線と一致して、第二の天使の路線における二度目の「倍化」を示している。十二のメシア的成就是、この十二章と相まって第二の天使の「倍化」である。しかし、それらを掛け合わせると十四万四千を表す。ペテロは「倍化」され、「十二」という数もまた「倍化」される。これらの「倍化」は、バビロンが二度倒れるという「倍化」を成就する。

第11章から第22章は、黙示録14章の第二の天使を表している。十は試練を象徴しており、三つの試練のうち最初のもは、マタイによる福音書の最初の十章である。「十」は試練を象徴する。マタイが黙示録のオメガに対するアルファであるため、どちらの書も第1章はイエス・キリストの啓示で始まる。マタイ第1章では、ヨセフは天使を信じるかどうかで試される。彼に対応する人物は洗礼者ヨハネの父ザカリヤであり、彼は信じず、同じ試練に失敗した。一人は神の摂理による誕生を受け入れ、もう一人は疑った。

第二章では、ヘロデは新しい王の誕生を恐れ、ヨセフとマリアはエジプトへ逃れた。バプテスマのヨハネは第三章で最初の試練をもたらししたが、この最初の試練をホワイト姉妹は生死に関わる試練と見なしている。というのも、彼女は「ヨハネのメッセージを拒んだ者は、イエスから益を受けることができなかった」と記しているからである。第一の天使は、人々に神を恐れよと呼びかける、ヨハネがそうしたような、人々を試すメッセージである。神の裁きの時が来ようとしているからだ。これは、ヨハネが「来たるべき怒りを逃れよと、だれがあなたがたに警告したのか」と問うたときに表されている。

そして第四章では、イエスは四十日間断食し、その終わりに三つの明確な試練を受ける。というのも、その三つの試練は、いつも第一の天使のメッセージのうちに表されているからである。続いてイエスは、弟子たちを選ぶことによって基礎を築き始められた。エズラとネヘミヤの時代には第一の勅令の歴史において神殿の基礎が据えられ、ミラー派の時代には第一の天使の歴史において基礎が据えられたのと同様である。基礎とは真福八端であり、その後にイエスの奇跡が続き、それが第十章を締めくくるかたちで十二弟子の派遣へとつながった。こうして十二弟子が揃い、靈感は弟子たちがキリスト教会の基礎であったことを示している。第十一章までに、その基礎は完成していた。

第十一章では弟子たちは自分たちだけで奉仕しており、イエスはお一人でおられる。これは第十章と第十一章の間に明確な区切りがあることを示している。第一章から第十章までは第一の天使のメッセージであり、それは第二の天使の到来によって終わった。第二の天使は、ミラー派とプロテスタントの間にあったような分裂、分離を生み出す。第十章はイエスが弟子たちから離れる場面で終わり、第十一章では彼はお一人でおられる。

第11章から第22章は第二の天使を表しており、第三の天使の第三の系列として第23章から第28章へと導いている。もちろん、第三の天使は日曜法に到達し、これは第26章から第28章の過越祭が表しているものである。「23」は贖いの象徴であり、それら六つの章のうち最初の章は第一の天使のメッセージを表し、最後の三章は第三の天使のメッセージを表す。中間の二章（24章と25章）は第二の天使を表す。最後の三章には「23」の特定の道標が含まれており、「23」の道標によって、第23章を第一の天使、すなわち始まりとして、第26章から第28章を第三として整列させている。第23章は第一の天使で、次の二章は第二の天使、最後の三章は第三の天使である。

マタイにおける第三のラインは第三の天使を表しており、三つの段階に分けられている。第23章が第一の段階であり、第一の天使である。第24章と第25章が第二の段階、第二の天使である。第26章・第27章・第28章が第三の段階、第三の天使である。第一の天使は1章、第二の天使は2章、第三の天使は3章。第三は過越祭であり、過越祭は十字架を表し、それはさらに日曜法と一致し、またペンテコステによっても表される。

五旬節は50を表し、50はヨベルの象徴である。ヨベルには第四十九年があり、それは七年の七回の周期の終わりである。49という数は50に先立つが、それと直結している。マタイによる福音書の第三のラインは23章から始まり、その後続く二つの章（24、25）の合計は49となり、数50を表す第三の天使の直前に位置する。

六つの章の並びの始まりは「23」で、終わりは「23」の道しるべであり、26章に27章と28章を加えた合計は「81」となる。これは、天の大祭司がその大祭司職の務めにおいて用いる流された血を示すまさにその聖句の中に埋め込まれている祭司たちの象徴である。このため、『The Desire of Ages』の「81」章の題はマタイ28章に基づいている。

第81章-「主はよみがえられた」

「この章はマタイ28:2-4、11-15に基づいている。」『各時代の希望』780ページ。

数「81」は祭司職を表しており、レビ記8章には祭司の聖別の七日間が記されている。民数記8章にはレビ人の清めが記されている。歴代誌下では、81人の祭司がウジヤ王に反対し、その箇所は十四万四千の封印のメッセージの確立に直接寄与している。

しかし彼が強くなると、自らの滅びに至るほどに心は高ぶった。彼はその神、主に背き、香の祭壇で香をたくために主の神殿に入った。祭司アザリヤが彼の後に入り、主の祭司である八十人の勇敢な者たちが彼とともにいた。彼らは王ウジヤに立ちはだかり、彼に言った。「ウジヤよ、主に香をたくことはあなたの務めではない。それは、香をたくために聖別されたアロンの子らである祭司の務めである。聖所から出なさい。あなたは背いた。このことは主なる神からあなたの誉れにはならない。」

そこでウジヤは怒り、香を焚くための香炉を手にしていて、彼が祭司たちに向かって怒っている間に、主の家の香の祭壇のそばで、彼の額にたちまちらい病が生じた。大祭司アザリヤとすべての祭司たちが彼を見ると、彼の額にらい病があるのが認められたので、彼らは彼をそこから追い出した。さらに、主が彼を打たれたので、彼自身も急いで出て行った。こうしてウジヤ王は死ぬ日までらい病人であり、らい病人であったため別の家に住んだ。彼は主の家から断たれていたからである。その子ヨタムが王宮をつかさどり、国の民を裁いた。歴代誌下 26:16-21

「八十一」という象徴は、ウジヤが聖所でいけにえをささげようとした試みに反対した祭司たちと結び付けられている。ウジヤに関する箇所の予言的構造は、ダニエル書11章11節と12節の予言的構造と一致している。どちらの箇所も、軍事的勝利、特に最近の北の王に対する勝利によって心が高ぶった南の王を描いている。ダニエル書11章11節がラフィアの戦いでプトレマイオスによって成就したとき、彼はウジヤと同様に、エルサレムの聖所でいけにえをささげようとしたが、祭司たちに阻まれた。行に行を重ねるように、二人の証人は、ほとんど終わりに近づいているウクライナ戦争を指し示している。

『The Desire of Ages』の第八十一章は、マタイによる福音書28章に基づいており、キリストが天の大祭司としての務めを始めるために昇天したことを明らかにしている。

さて、これまで私たちが語ってきたことの要点はこれです。私たちには、このような大祭司がおられ、天における威光の御座の右に着座しておられます。ヘブル人への手紙 8:1

「81」という数は、祭司の象徴であり、第26章、第27章、第28章の象徴でもある。マタイにおける三行目の第三段階は合計すると81になる。第二段階は49となり、第一段階は23である。ウジヤの証しにおいて、81は80人の祭司と一人の大祭司を表す。このレベルでは、80人の祭司は人間であり、大祭司は神聖である。81は、神性と人間性の結合を表す。数81の中の1は神性を表す。

「11」における「1」は、人間性と神性の両方を表す。「21」という数における「1」は神性を、「20」は人間性を表す。二と一の組み合わせは、エマオ途上の弟子たちに見られる。

シャデラク、メシャク、アベデネゴの燃える炉が示すように、三と一の組み合わせは人性と神性である。

四と一の組み合わせは、神性と人間性の結合が第四世代において成就されることを示している。

五と一の組み合わせは、花婿を待つ五人の乙女を表している。

六と一の組み合わせは、人間と第七日安息日との関係を表しており、その主は神である。「六」という数字は人間の象徴であり、「一」はキリストである。

七と一の組み合わせは、七つの教会の第七であるラオデキアがフィラデルフィア的体験へと移行することを表している。

81は、祭司たちと大祭司との関係の象徴である。

九と一の組み合わせは、物事の完成を示す。妊娠は九か月である。ノアに至るまで九世代があり、その後、契約に至るまでさらに九世代があった。イエスは第九時に息を引き取られた。九と一の組み合わせは、彼の民に印を押す働きの完了を示している。

この文脈では、一は人性と神性の結合であり、二は人類を教える神なる教師である。三は三天使のメッセージであり、それは二で教えられるメッセージである。四は第四世代を指し示し、したがって、五人の賢い乙女が顕現し、第六の創造日に象徴されるように再創造される時の預言的歴史を特定する。次に第七の段階は、フィラデルフィアへの移行と、七のうちの八なる者の謎を指し示す。その時点で契約が成就し、「81」の祭司職が高く掲げられて、九という数で表される働きを完了する。各段階において、一はユダ族の獅子であり、同時に「驚くべき数を数える者」パルモニでもある。81は祭司の象徴である。パルモニはすべての数を創造した。

11という数は22の半分を表し、両者はいずれも神性と人間性の結びつきを表している。最近の記事で、私は始まりと終わりを扱う二つの記述を含めた。

最初の記述は、エレン・ホワイトが聖所に関する最初の異象を見たとき、安息日の戒めが他の戒めよりも明るく輝いているのを示されたと述べていた。さらに彼女は、終わりの時代には「受肉の教理」が柔らかな光を帯びることも示された。初めにおける光であった安息日は、終わりにおける受肉の教理の型であった。神性と人性の結合こそが受肉の教理である。というのも、それはキリストがご自身に人性をお取りになったという教理であり、このようにして、神性が人性と結合しても罪を犯さないことを模範としてお示しになったからである。

十一足す十一は二十二であり、十二章からなる契約線のそれぞれは十一で始まり、それぞれ二十二で終わる。聖書の中の十一章や十一節は、十四万四千人の道しるべを表している。

2014

ウクライナでの戦争は2014年に始まり、十四万四千人の封印の時期の外縁をなす。

そして南の王は激怒して出て行き、彼、すなわち北の王と戦う。彼は大軍を繰り出す
が、その軍勢は彼の手には渡される。ダニエル書 11:11。

2020年7月18日

最初の失望は、イエスがラザロをよみがえらせに行くのを遅らせたことであった。ラザロをよみがえらせることは、奇跡の集大成であり、神の証印であった。イエスはラザロをよみがえらせる前に四日間待った。ヨハネのその箇所は、ヨハネの福音書の中で直接特定されている七つの奇跡の最後のものを示している。最初は水をぶどう酒に変えることだった。ヨハネ11章11節で頂点に達する七つの奇跡を考察することには多くの示唆があり、それらの奇跡が直接特定されていることに基づいて、ヨハネには七つの奇跡しかないという点で、すべての神学者が一致している。このため、彼らはキリストの復活を第八のしるしには含めない。しかし、それも奇跡であり、彼の復活は契約のしるしである。ゆえに、ヨハネの福音書における復活は、七つに続く第八の奇跡である。というのも、先の七つの奇跡はそれぞれ、彼の復活の力によって成し遂げられたからである。

彼はこれらのことを言われた後、さらに彼らに言われた。「私たちの友ラザロは眠っている。しかし、私は彼を眠りから起こしに行く。」ヨハネによる福音書 11:11

2023年7月

2023年7月、荒野で叫ぶ者の声は、いのちの御霊を帯びたメッセージを叫び始めた。

三日半ののち、神からのいのちの霊が彼らのうちに入り、彼らは立ち上がった。彼らを見た者たちには大きな恐れが臨んだ。黙示録 11:11

ヨハネは日曜法の八日前に生まれる。というのも、彼の父ゼカリヤが語るのは日曜法の時だからである。ヨハネの名は日曜法の時にゼカリヤからヨハネへと改められ、その改名が契約関係を示す。その誕生は、2020年7月18日に通りで殺された人々の復活を象徴している。

まことに、あなたがたに言う。女から生まれた者のうち、バプテスマのヨハネよりも偉大な者は現れなかった。しかし、天の御国で最も小さい者でも、彼よりは偉大である。マタイ 11:11.

二千二十四

イザヤは、1849年に成就した第二の集結を示している。第二の集結は2023年7月に始まり、神の民が印を押されるときに終わる。

その日には、主はもう一度、すなわち二度目に御手を伸ばし、ご自分の民のうち残された者たちを、アッシリア、エジプト、パトロス、クシュ、エラム、シナル、ハマテ、そして海の島々から取り戻される。イザヤ書 11:11

日曜法の直前

イエスはちょうど凱旋入城を終え、それによって真夜中の叫びから日曜法への移行を示している。彼は十二弟子を伴っている。というのも、彼らは日曜法の前にすでに選ばれているからである。

イエスはエルサレムに入って宮に入られた。そして、すべてのものを見回してから、もう夕方になっていたので、十二人とともにベタニアへ出て行かれた。マルコによる福音書 11:11

日曜令の直前、十四万四千人への封印が完了するとき、神性という夫と人類という妻との結び合わせは完成し、贖いが完了したゆえに、両者は永遠に一つとなる。

しかし、主にあっては、男は女から独立しておらず、女も男から独立してはいません。コリント人への第一の手紙 11章11節。

1863年の反逆以来長らく遅れていたサラの奇跡の出産は、黙示録12章の女が双子を出産するときに成就する。第一の子は「真夜中の叫び」のときに生まれ、第二の子は「日曜法」のときに生まれる。後から出てきた子は、エリコでのラハブのしるしを表す緋の紐を持っていた。

信仰によって、サラ自身もまた、子を宿す力を受け、生むには年齢を過ぎていたのに出産した。約束してくださった方を真実な方だと認めたからである。ヘブル人への手紙 11:11.

ラオデキヤのための日曜法

エレミヤは、ラオディキアのセブンスデー・アドベンチスト教会の裁きを示す。

それゆえ、主はこう仰せられる。見よ、わたしは彼らが逃れられない災いを彼らに下さす。たとえ彼らがわたしに叫んでも、わたしは聞き入れない。エレミヤ書 11:11

エゼキエルは、アドベンチズムに対するエレミヤの判断に同意している。

この町はあなたがたの鍋とはならず、あなたがたはその中の肉ともならない。しかし、わたしはイスラエルの境でああなたがたを裁く。エゼキエル書 11:11

神の契約の民として古代イスラエルが見過ごされることには、彼らが自ら捨て去ったものをめぐって、神がかつての契約の民にねたみを起こさせることが含まれている。これは日曜法のとときにアドベント主義にも繰り返される。

では、こう言います。彼らは倒れるためにつまずいたのでしょうか。決してそうではない。むしろ、彼らのつまずきによって救いが異邦人にもたらされ、彼らをねたませるためなのです。ローマ 11:11。

彼らが退けているウィリアム・ミラーの働きに基づくアドベンティズムは、なおも神殿を建てた運動である。しかし、同じく神殿を建てたソロモンの場合と同様に、彼らは契約を破り、彼らの王国は彼らから取り上げられ、神が命じるとおりに神のぶどう園を管理する民に与えられるだろう。

それゆえ、主はソロモンに言われた。「あなたがこのことを行い、わたしの契約とわたしの掟を、わたしがあなたに命じたとおりに守らなかったので、わたしは必ず王国をあなたから取り上げ、あなたのしもべに与える。」列王記上11章11節

フィラデルフィアの日曜法

日曜法のととき、預言者たちによれば、勝利の教会は自らの地に置かれ、その地は後の雨のメッセージに満ちあふれた地である。エリコは1863年に再建され、日曜法のとときに崩れ落ちる。

しかし、あなたがたが行ってそれを所有しようとしている地は、丘と谷の地で、天からの雨水を飲む。申命記 11:11。

都市は王国であり、凱旋の教会はキリストの栄光の王国を表している。その凱旋の教会の王国は、日曜法令のとときに始まり、そのとき彼の教会はすべての山や丘を超えて高く掲げられ、崇められる。

正しい者の祝福によって町は高められるが、悪者の口によって町は覆される。箴言 11:11

第九時に、天使がコルネリオスのもとに来てペテロを呼び寄せるよう命じた。これにより、日曜法において福音が異邦人へ向かう時が示される。ペテロが行くよう神に指示されたのは、汚れた動物を食べる幻の文脈においてであった。これは日曜法において成就する。第九時は、キリストが死なれた第九時と一致する。第九時は、イエスが十字架につけられた第三時に始まり、六時間後に死なれた、その期間の終わりを表す。それは、第三時には二階の部屋にいたペテロが、第九時には神殿にいたという、同じ期間でもある。一つの第九時はキリストの死で終わり、次の第九時にはペテロが神殿でヨエルのメッセージを宣べ伝えている。キリストの死はイスラエルとの契約関係を終わらせ、コルネリオスに代表される異邦人への門を開いた。

そして、見よ、ただちに、私のいた家に、カイサリアから私のもとに遣わされた三人の者がすでに来ていた。使徒の働き 11:11

それらはあなたがたにとって忌むべきものである。あなたがたはその肉を食べてはならない。しかし、その死骸を忌み嫌わなければならない。レビ記 11:11.

次回の記事でこの研究を続けます。

私は、神が見えない御手によって、長さ約10インチ、六インチ四方の、不思議な細工が施された小箱を私に送ってくださったという夢を見た。その小箱は黒檀で作られ、真珠が巧みに象嵌されていた。小箱には鍵が付いていた。私はすぐにその鍵を取り、小箱を開けたところ、驚いたことに、箱の中はあらゆる種類や大きさの宝石、ダイヤモンド、貴石、そして大小さまざまで価値もさまざまな金貨や銀貨で満ちており、それぞれ所定の位置に美しく並べられていた。そしてそのように並べられて、太陽にのみ匹敵するほどの光と栄光を反射していた....

「私は小箱の中をのぞき込んだが、その光景のまばゆさに目がくらんだ。それらは以前の栄光の十倍もの輝きを放っていた。私は、それらは、あの邪悪な者たちが塵の中に撒き散らし踏みにじったとき、その足によって砂で擦り減らされてしまったのだと思っていた。小箱の中には整然と美しく並べられ、一つ一つがそれぞれの場所にあり、そこへそれらを投げ入れた男による目に見える損傷もなかった。私は喜びのあまり叫び声を上げ、その叫びで目が覚めた。」 Early Writings, 81-83.

「あなたがたは主の再臨をあまりにも先のことと考えすぎている。私は、後の雨が真夜中の叫びのように[突然に]降り、その力は十倍であったのを見た。」 Spalding and Magan, 5.

そして、王が彼らに尋ねた知恵と理解に関するすべての事柄において、彼は、彼らが王国全体にいたすべての魔術師や占星術師よりも十倍も優れていることを見いだした。ダニエル 1:18-20.